幼小接続研究の現状と課題 ―文部科学省研究開発学校を事例にして―

久野 弘 幸

(生活科教育講座)

Toward a Smooth Transfer from Kindergarten to Elementary School - From Case Studies of Research Development School by MEXT -

Hiroyuki KUNO

(Department of Life Environment Studies Education)

はじめに

平成 11 年の東京都馬幼稚園における研究開発学校指定を皮切りに¹⁾、文部科学省（以下、文科省とする）による「幼小連携」を主なテーマとした開発指定校研究が進められている。文科省による幼小連携研究の推進・支援は、平成 10 年 7 月の教育課程審議会答申において「小学校における生活科などとの関連に留意し、幼稚園における主体的な遊びを中心とした総合的な指導から小学校への一貫した流れができるように配慮する必要がある²⁾」と指摘されたことを受けてのことであるが、その底流には従来から堅固に保たれてきた二つの枠組みを再編成するねらいを持つものと考えられる。二つの枠組みとは、一つには戦後 50 年以上にわたって維持されてきた 6-3-3 制という学制の枠組みであり、もう一つは小学校における教科の枠組みである。幼小連携に関する研究は、この二つの枠組み、すなわち学校教育制度の根幹を構成する二つの枠組みを再度吟味し、それらを子どもの成長に即したより弾力的な枠組みに修正するためには、どのような改善の方向を取るべきかについて知見を得る重要な作業であるといえる。

本稿においては、短期集中的に取り組まれている幼小連携の実践カリキュラム開発を整理し、その知見からどのような方向で枠組みの修正が進められるのか、幼小連携研究から読み解くことにする。そのために、本稿では「幼小連携」を課題にした文部科学省指定の研究開発校から二つの事例を取り上げ、それぞれがどのような研究のねらいと方向性を持ち、幼小連携の研究に取り組み、成果と課題を明らかにしつつあるのか論じたい。本稿で取り上げる研究開

発としての幼小連携研究の多くは、現在（平成 15 年 10 月時点）も進行中であり、研究の完成はさらに数年先の見通しである。したがって、それらの開発研究の完了を待つてその成果を見極めることが妥当な作業手順であるといえるが、本稿は開発研究の完了後にその意義を評価することを目的とするのではなく、幼小連携研究の動向を探り、その成果と課題からさらなる研究への示唆を得るための作業だと位置づけている。そのため、幼小連携研究開発指定校による最新の開発研究に学びながら、幼小連携研究開発の中間整理と位置づけたい。

本稿は、上記のような関心から次に示す二つの研究開発の事例を考察し、それらの先行研究事例からこれからの幼小連携研究の方向性を明らかにする。取り上げる研究事例は、三木市立口吉川幼稚園・小学校（平成 13～15 年度研究開発指定）、および鳴門教育大学附属幼稚園・小学校（平成 13～15 年度研究開発指定）である³⁾。

1 「幼小 7 カ年」を単位としたカリキュラム開発 ―三木市立口吉川幼稚園・小学校―

はじめに取り上げる幼小連携研究の事例は、兵庫県三木市立口吉川幼稚園・小学校（以下、口吉川幼小と略す）における研究開発である。口吉川幼稚園・小学校は、神戸市から北へ約 25km の山間地域にあり、幼稚園、小学校ともに 1 学年 1 学級の小規模校である。口吉川幼稚園が 5 歳児のみの 1 年保育であることから、口吉川幼小における幼小連携研究は、幼稚園 1 カ年、小学校 6 カ年の 7 年間を単位としたカリキュラム開発研究となる。口吉川幼小の研究開

発の目的は、幼稚園から小学校へのなめらかな接続を保障するカリキュラムの開発であり、その中核は幼稚園における総合的な遊びから小学校における生活探究コースとしての「みなぎのコース⁴⁾」への円滑な移行である。

①「みなぎのコース内容系列表」による7カ年の生活探究コースの開発

口吉川幼小の研究開発の中核をなすものが「みなぎのコース」の内容系列表である⁵⁾。みなぎのコースとは、幼稚園から小学校にかけての全課程の中で子どもの生活経験から得られる成長発達課題を「生命・健康」「成長・自己」「遊びや生活の工夫・安全」「共生」「地域生活」「自然環境」という6つの領域から捉え、それぞれの領域ごとに「目標」、子どもが培うべき「内容」、そして学年段階による具体的内容を記したものである。

みなぎのコースの6つの領域から「共生」に着目し、その内容の系列を詳しく検討する。下の表は、みなぎのコースにおける領域「共生」の内容系列である。最左段に領域名が記され、その右に当該領域における「目標」が掲げられている。この目標は、当該領域において実現すべきねらいを示したもので、理念的方向性を示している。目標に続いて、当該領域において保育・教育実践によって具体的に達成を図る「内容」である。この内容は、「地域生活」と「自然環境」の領域は3つの内容、それ以外は2つの内

容により構成されている。「内容」の右は、幼稚園、小学校1・2年、3・4年、5・6年の順に、「内容」を学年段階ごとに具体的に記したものである。各学年の担任は、この内容系列表に示された学年別の内容にのっとり、1年間の保育計画ならびにみなぎのコースの単元を構想することになる。

②「教科につながる内容系列表」による7カ年の教科学習内容構成

生活探究コースであるみなぎのコースが、子どもの身の回りの生活や具体的な対象から学びを構想するのに対し、「教科につながる内容系列表」は、幼稚園における学びの要素の中から小学校のある時期から教科へとつながる内容を整理し、学習内容としての系統的な関連を表に示したものである。みなぎのコースの開発においては幼稚園教育要領から小学校生活科および総合的な学習の時間への関連が考慮され、生活探究としての学びが成立している。これに対し、みなぎのコースだけでは幼稚園の活動内容の視点として不十分ではないかという疑問から、幼稚園での生活において同様に大切にされている言語や数などの領域についても小学校の学習内容との関連性を図るべきであるとの結論に達し、幼稚園での学びから「教科に発展していく内容」として言語、数量形、表現、身体運動の4つの領域を視点として設けることになった。

表1：「みなぎのコース」における領域「共生」の内容系列

領域	目標	内容	幼稚園	1・2年	3・4年	5・6年
共生	様々な人々がそれぞれに生きがいをもって生きようとしていること、そのためにお互いに助け合っていることを理解し、より一層充実した共生社会の実現に貢献する資質や能力を育てる。	ア 様々な人々が、それぞれに生きがいを持って生きようとしていることを理解し、すべての人々の存在を尊重した接し方ができる。 イ 人々が互いに助け合っていることを理解するとともに、共生社会の実現について考え、貢献しようとする。	ア 身近な人々とのふれあいを楽しみ、進んで接しようとする。 イ 先生や友達と関わる中で、ふれあっていく楽しさや、きまり・マナーの大切さを知る。	ア 身近な人々との交流を深めることによって、それらの人々に親しみを持って接する。 イ 身近な人々と気持ちよく生活するために必要なきまりやマナーを守り、助け合おうとする。	ア とともに活動することを通して、すべての人の存在の大切さに気づき、温かい気持ちで接する。 イ 身近な高齢者、年少者、障害者等様々な人が生活しやすいように、身近な所に配慮や工夫があることに気づき、自分にもできる活動を実践しようとする。	ア 様々な人がそれぞれに生きがいをもって生き、かけがえの内存在であることを理解し、その人の思いや願いを尊重した接し方ができる。 イ 日々の生活は人々の支えや助けによって成り立っていることに気づき、共生社会を実現するために自分にもできる活動を進んで実践しようとする。

[出典：兵庫県三木市立口吉川幼稚園・小学校研究資料より]

表2：「教科につながる内容系列表」における領域「数量形」の内容系列

領域	幼稚園	1年	3年	5年	領域	教科と目標
数量形	<p>・身近なものの色や形に興味を持ち、分けたり集めたりして遊ぶ。</p> <p>・物には形や位置があることに興味をもつとともに、それらに適した言葉を意識し、必要に応じて使う。</p>	<p>身近な立体についての観察や構成などの活動を通して、図形についての理解の基礎となる経験を豊かにする。</p>	<p>ものの形についての観察夜行性などの活動を通して、基本的な図形について理解できるようにする。</p>	<p>図形についての観察や構成などの活動を通して、基本的な平面図形についての理解を一層深めるとともに、図形の構成要素及びそれらの位置関係に着目して考察できるようにする。</p>	図形	<p>算数</p> <p>数量や図形についての算数的活動を通して、基礎的な知識と技能を身に付け、日常の事象について見通しを持ち筋道を立てて考える能力を育てるとともに、活動の楽しさや数理的な処理のよさに気づき、進んで生活に生かそうとする態度を育てる。</p>
		2年	4年	6年		
		<p>ものの形についての観察や公正などの活動を通して、図形についての理解の基礎となる経験を一層豊かにする。</p>	<p>図形についての観察や構成などの活動を通して、基本的な図形についての理解を深める</p>	<p>図形についての観察や構成などの活動を通して、基本的な立体図形についての理解を深めるとともに、図形の構成要素及びそれらの位置関係に着目して考察ができるようにする。</p>		

〔出典：兵庫県三木市立口吉川幼稚園・小学校『平成14年度研究開発実施報告書』、2003年、10-11頁〕

平成14年（第二年次）の『研究開発実施報告書』によれば、言語は「経験したことや考えたことなど自分なりの言葉で表現し、相手の話ことばを聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚を育てる」ことをねらいとし、数量形は「日常生活の遊びの中から必要を感じて数を数えたり、量を比べたり、様々な形を組み合わせたなど数量や図形に関心を持つ」ことをめざす。表現では、「日々の生活の中での心の動きを自分の声や体の動き、素材となるものを通してイメージを広げ、感じたこと、考えたことなどを表現する力」を養い、身体運動では「戸外での遊具と使った遊びや集団遊びなどの体を使った遊びを中心に自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」子どもの姿を捉える視点となる⁹⁾。当然のことながらこれらのねらいや意図は、幼稚園における生活の中に成立するのであって、特定の領域の能力を取り出して訓練を施すことを目的としてはいない。むしろ、日々の園の生活の中にそれらの視点を持ち、それらが後々に教科の領域としてつながっていくことをイメージすることによって活動の見取りにもう一つの視点を加えるのである。

③口吉川幼稚園における連携カリキュラムの実際

口吉川幼小の連携研究をもとに、幼稚園において

はみなぎのコースの6領域および教科につながる内容系列の4領域を月別指導計画の中に反映させて、保育の指針としている。月別指導計画の例を示せば次頁の表3のようになる。

表3の「幼児の学び・育ち」欄の内点線で区切られた上段がみなぎのコースにおける6領域であり、下段が教科につながる内容系列の4領域である（ただし、みなぎのコースにおける「人間関係」は、平成15年度の研究において「共生」に修正されている）。

表3と前項で記した「教科につながる内容系列表」の「数量形」の内容とを重ね合わせてみると、12月の「氷で遊ぶ」の活動において、「みなぎのコース 自然環境」の側面から「遊びの中で冬の自然現象に興味をもつようになる」ことをめざすとともに、「数量形」の視点においては、「いろいろな形の容器に氷を作って遊ぶ」活動を通して、「物には形や位置があることに興味をもつ」ことがねらいとなる。

このように口吉川幼小では、「みなぎのコース内容系列表」と「教科につながる内容系列表」の二つの系列表を作成することによって、幼稚園から小学校までの7カ年を見通した連携カリキュラムを開発している。最終年次となる平成15年度においては、そ

表3：口吉川幼稚園月別指導計画（12月）

		(1 2 月) (第1~2週間)	(第3~4・5週間)
指 導 計 画	ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> 寒さに負けず、戸外で元気に遊ぶ。 冬の自然現象に興味をもち、取り入れて遊ぶ。 集団遊びを楽しみ、氷や雪に気づき関心をもつ。 自分たちがしている遊びを友だちや家の人に見てもらい喜びを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> 年末の社会現象と日本古来の風習に関心をもつ。 自分たちで遊びを考えていく楽しさやおもしろさを感じとる。 友だちのよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。
	環 境 構 成 の ポ イ ン ト	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたち一人一人の思いを大切にしながら小道具作りのアイデアを生かしていき、友だち同士が互いに認め合える場にしていく。 保護者の方に頑張ってきた様子を知らせ、認めてもらえるように伝える。 サンタクロースにプレゼントがもらえるように、手紙を書いたり、袋を作ったりして期待をもたせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 拾った木の実や木の葉を分類しておき、リース作りに玉次できるようにする。 冬の現象に気づくようにタライや容器に水を張っておく。 鬼ごっこやボール遊びができるようにライン引きやボールを用意しておく。
幼 児 の 実 際 の 姿		「11ぴきのねこ」の劇をする。 とび箱、なわとび、長縄とび……>	(1年生と一緒に) 木の葉や木の実に遊ぶ……> お料理作り あやとり……> こま……>
幼 児 の 学 び ・ 育 ち	生 命 ・ 健 康	友だちができたことを一緒に喜んだり、なわとびを数えたりすることができる。	
	自 己 ・ 成 長		
	人 間 関 係	みんなで考えを出し合ってルールを作り、それを守って遊ぶ。	自分のしたいことを工夫して1年生と共に作りあげていくことを楽しむ。
	学 校 ・ 園 で の 生 活 ・ 遊 び	発表会でお客様に観てもらいたいことを喜ぶ。	材料を丁寧に切り、みんなでお料理を作ることを楽しむ。
	地 域 生 活	遊びの中で冬の自然現象に興味をもつようになる。	
	自 然 環 境	感触を楽しむ。	
	言 語	友だちとの会話を楽しむ。	音階を知る。
数 量 形	いろいろな形の容器に氷を作って遊ぶ。		
表 現	みんなで音を合わせることを実感し、演奏する。		
身 体 運 動	道具を使い、役を代わり合ってごっこ遊びを楽しむ。		
		歌を歌いながら長なわとびをして楽しむ。	

[出典：兵庫県三木市立口吉川幼稚園・小学校『平成14年度研究開発実施報告書』、2003年、30頁]

これらの系列表に基づいた実践を展開し、その結果にもとづいてさらにカリキュラムを修正するという循環的なカリキュラム開発を行っている。

2 「幼小合同保育・授業」を核にした実践単元開発 —鳴門教育大学附属幼稚園・小学校—

鳴門教育大学附属幼稚園・小学校（以下、鳴門幼小と略す）における幼小連携の研究開発指定は、平成13年度から開始されているが、その3年前の平成10年から3年間にわたり附属小学校が「幼・小・中の連携等を考慮した教育課程のあり方」に関する研究開発学校の指定を受けている。小学校が先行して研究開発を経験したことが、幼小連携の研究開発にも大きく作用している⁷⁾。附属小学校における3年間の研究開発を通して、小学校の転学年担当者に幼稚園との接続を意識したカリキュラムの意義と必要性が認識された。このことは、鳴門幼小における研究開発を大きく推進させる一つの要因であると考えら

れる。

本項では、鳴門幼小における開発研究を次の3つの点から述べる。第一に、幼稚園とのなめらかな接続を考慮して編成された小学校第1学年の年間指導計画について、第二に、第1学年の年間計画の中から「幼小合同保育・授業」の取り組み、第三に幼小の教員間の保育・授業観を共有するための「エピソード分析」と「保育・授業カンファレンス」である。

①指導原理とカリキュラムの接続

附属小学校の木下光二教諭は、平成10年からの3年間にわたり低学年担当の立場から附属小学校における研究開発に取り組んだ。その結果、「幼稚園の教育から小学校第1学年に、どのように自然に移行・接続するか」という研究課題に対し、「幼稚園と同じ指導原理に立って、生活に即した『生活学習』を展開する」との結論を得た⁸⁾。その考えを具体的に計画案として示したものが、次頁の図に示す第1学年年間指導計画である⁹⁾。

表4：鳴門教育大学附属小学校 第1学年用年間指導計画

第1学年 年間指導計画												
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	臨時休校
道徳	あそぼよ											
特別	あそぼよ											
833	あそぼよ											
国語	あそぼよ											
算数	あそぼよ											
音楽	あそぼよ											
図工	あそぼよ											
体育	あそぼよ											

[出典：鳴門教育大学附属幼稚園『平成13年度研究開発実施報告書』、2002年、26頁]

年間指導計画を見ても、小学校の年間指導計画から教科の枠組みが取り払われ、幼稚園の年間計画立案の発想に近づいていることが分かる。「はぐくみ総合¹⁰⁾」は、教科のみにとどまらず、道徳と特別活動を含む、総合単元としての年間計画となっている。年間指導計画から4月の学習活動をみてみよう。年間指導計画には、4月から6月半ばまで「がっこうたんけん」という大きな枠組みの中で各単元が位置づけられている。その中で4月の単元に注目すると、はぐくみ総合として中核的に取り込まれる大単元「しろやまたんけん」「あそぼよ」の他、第2学年以降主に国語へと分化する内容である「ことばのけいこ」「ひらがなずかん」「ことばあそび」「あいさつのうた」、同様に主に算数に分化する「〇〇があったよ」、主に音楽に分化する「なかよくうたって、おどって」、主に図工に分化する「なにをかこうかな」「すきなもののいっぱい」、主に体育に分化する「がっこうには、あそびどうぐがいっぱい」の各単元が含まれている。このように、第2学年以降の教科への分化を意識しながら、すべての学習単元から教科の枠組みが外され、子どもの生活学習を単位とした活動名が記されている。

②「幼小合同保育・授業」を核にした実践単元の開発

前項で示した小学校第1学年はぐくみ総合の年間指導計画の内、「〇〇があったよ」(4月)、「こうえんかるたをつくろう」(5月)、「こんなことできるよ見つけた石で」(5~6月)、「カレンダーをつくろう その2」(9月)、「ようちえんかるたをつくろう」(10~11月)の5つの単元が、平成13年度の『研究開発実施報告書』に報告された小学校における「幼小合同授業」の単元である。その中から、9月の実践である「カレンダーを作ろう その2」を取り上げ、幼小合同保育・授業の実践について考察したい¹¹⁾。

「カレンダーを作ろう その2」は、年間指導計画にあるように第2学年以降は、主に算数に展開する内容領域であり、小学校第1学年の単元としては、「20までのかず」を中心とする単元である¹²⁾。カレンダーづくりを通して培う本単元の目標としては、「30までの数を表すよさを知り、数の構成の考え方を身につけたり、進んで生かそうとしたりすること、「30までの数の構成について理解し、読んだり、書いたりすることができる」こと、「数の構成にもと

づく加減の計算（10 何+1 位数や 10 何-1 位数）ができる」ことという数に関わる目標の他に、「カレンダーに記入する言葉や数字、曜日などについて感じやカタカナなどを使用することができる」こと、「生活の中の思い出に残る場面を思い浮かべながら、文を書いたり、絵を描いたり、写真を貼り付けたりすることができる」ことという言語に関わる目標、および「友達と協力して、楽しく活動することができる」という人間関係に関わる目標の6項目が立てられている。

幼稚園児との合同授業は、カレンダーづくりの最後の段階「自分の好きな月のカレンダーをつくろう」である。この時間の活動は、1年生の児童と園児と一緒にそれぞれに好きな月のカレンダーを作ることにあるが、それ以前の授業でしばしば取り組まれた、あらかじめ児童が小学校で作ってきたものを持ち込んで園児に提供する形で一緒に遊ぶという「招待型」授業ではなく、園児も児童もそれぞれが自分の作品を作るという「協働型」の活動が計画されている。つまり、幼稚園内の遊戯室に児童がカレンダー作りの道具を持ち込み、そこで活動を始めることによって、関心をもった幼児が自然に集まり、カレンダー作りに参加していくのである。このとき授業者は、遊戯室内にカレンダー作りの材料を用意しておき、園児が自由に活動に参加できるように配慮している。そのため、園児も通常の遊びの延長にある活動として1年生の動きを見ながら、そのまねをして制作を始めることができる。

活動を進めるうちに、園児は曜日や日にちに約束があること、数の構成にも約束があることなどを1年生から教えてもらったり、数を順番に書くなどの作業に取り組んでいった。また、児童は園児に伝えるようにカレンダーの作り方を説明したり、説明をしながらカレンダーのしくみを納得したりするなど、幼児との関わりの中で児童の成長する姿を捉えることができた。

この「カレンダーづくり その2」の幼小合同授業の特徴として特筆されることは、1年生の授業を幼稚園内において展開することで、授業そのものが幼児にとっての環境構成の一部となっていることである。幼児にとっては、普段の遊びの延長にカレンダー作りの場が用意され、特別な緊張や違和感を抱

くことなく1年生との交流活動（遊び）に参加することができる。また、1年生にとっても、活動の場が幼稚園内であるというだけで、それまでのカレンダー作りの単元がそのまま展開される授業となっている。材料も時間も十分に確保され、広い遊戯室での活動であるため、幼児と児童がそろってカレンダー作りを行う物理的空間的障害もなく、幼児も児童も相互に関わり合いながらそれぞれに作品を完成させることができた。

③「エピソード分析」「保育・授業カンファレンス」による授業観の共有

鳴門幼小においては、幼児の活動の記録を下のような「エピソード分析」の記録に整理し、その記録を幼稚園教諭、小学校教諭、研究協力者である大学担当教官、大学院生（現職教員）という様々な視点を持ち寄り「保育・授業カンファレンス」によって子どもの姿を捉えている。幼小の教員はもちろん、研究者や大学院生を含めた「保育・授業カンファレンス」を行うことによって、エピソード分析を複数の視点によってさらに深め、遊び体験に込められた教育的意義の追究を行うのである。

エピソード分析の例を示せば次頁の通りとなる。事例に取り上げたのは、「幼児の遊びを算数科の窓口からみる」場合にどのように幼稚園から小学校の学びへと接続しているかを保育事例を通して考察したものである¹³⁾（本文の上段はエピソード、下段は考察）。このエピソード場面を共同で分析、考察する保育カンファレンスにおいて、算数科教育を専門とする大学の担当教官は「出来上がったプリンを並べていくことにより前後・上下・左右の関係などの空間認識を感覚的に獲得していると思われる。同じ物を同じ量、型に同じ量だけの砂を入れて並べていく操作、このことで砂をどれだけ入れればイメージどおりのプリンが出来上がるかという量についての感覚を手の感覚などで子どもなりに獲得していると考ええる。（中略）このように、幼稚園での砂遊びの経験が小学校の算数で行われる量の数値化、すなわち量の比較における直接比較や間接比較、量の測定における任意単位や共通単位などの場面で生きている経験となるであろう」と述べている。また現職小学校教諭である大学院生も「こういった経験を小学校で

表5：エピソード分析の例

平成13年5月11日(金) 晴れ	3歳児
型押し遊び	
記録(戸川 洋子)	
<p>砂場で子どもたちが遊んでいる。アユ、アオイ、コウタロウ、ユウヘイは、小さいスコップで果物やプリンなどの色々な形をしたカップに砂を入れ、型押しをして遊んでいる。</p> <p>アユはプリン型のカップの中にスコップいっぱい砂をほわっとすくい入れ、ひっくり返す。できあがったものは形にならず崩れてしまっている。それを何度か繰り返す。今度は、砂をカップに盛り上がるぐらい入れる。プリンのようにならず、卵黄が崩れているいびつな目玉焼きのような形になってしまう。それをじっと見たアユは、次にはたくさん砂を入れ、上からスコップで砂を押し込むようにペタペタと押し、すばやくひっくり返す。するとできあがった物はプリンの形になっている。満足げに見た後、次々と同じようにプリンを順に並べていく。5個プリンが並ぶと、「プリンができましたよ。どうぞ」と私に言う。私は、「どれを食べてもいいんですか」と尋ねると、「どれでもいいですよ。でも・・・」と言いながら、自分の作ったプリンを眺めていて「こっちがいいかもしれません」とプリン型に固まっているのを指して言う。「ありがとう。じゃこれをいただきます」</p>	
<p>私は、アユの選んだ一番しっかりと型押しされて形の整ったプリンをいただいた。</p>	
<p>砂遊びは、子どもたちの大好きな遊びである。少し湿り気を含ませたり、さらさらの砂のままに残したりするなど、子どもたちの遊びを予想して砂の状態を毎朝整えている。</p> <p>友達が型押しをしているのを横でずっと見ていたアユは自分もしたいと思ったのか、友達を真似てやり始めた。はじめ砂をほわっとした感じ(砂の密度が低い)に入れ、ひっくり返していた。次には満杯の砂の量を入れ、ひっくり返すがこの時も整った形にはならず、崩れてしまっている。さらに上からペタペタと砂を入れて押し込み、ひっくり返す。と偶然だろうか、型押し容器とそっくり同じ形の整ったプリン型にできた。その後アユは続けて型押しをし、この中には多少端の欠けているものもあったが、同じ形が次々とでき成就感を味わったであろう。ひっくり返すのも段々と砂をこぼさずしようと指先に意識を込めるようになってきた。</p> <p>はじめは思っていた形にならなかったけれど、何回も何回も繰り返していく内に偶然に願っていた形のプリンにできた。「ほわっ」とではなく、ペタペタと固く押し込み砂の密度を高くすることやひっくり返す時に意識を集中させることなどの巧みな方法に気付いて行ったと思われる。また、アユは出来上がって一列に並んでいるものの出来映えを比較したのだろうか、その中から一番整った形のものを選択していった。</p>	
[出典：鳴門教育大学附属幼稚園『平成13年度研究開発実施報告書』、2002年、57-58頁]	

は抽象化していくわけであり、その抽象化に至るまでの多様な感覚の獲得や具体的な経験を幼稚園の遊びを通して行っていくことは非常に重要なことであろう」との意見を述べている。

幼稚園での遊びの中に教育的意義を見出すことのできない、あるいは幼稚園の実践は難しいと感じる小学校教諭は少なくないであろう。エピソード分析は、エピソードによって園児が日々の生活の中で実践している学びを明示的に記録化し、それを第一次資料として分析・考察を加えることが可能になる。さらにその場面を記録者が保育カンファレンスの場で報告し、立場の異なる者の見解や解釈を加えることによって、さらに一つの実践から豊かな学びの姿を読み出すことが可能になる。小学校教諭との合同の保育カンファレンスの意義は、このような見取りを共有化し、小学校教諭は小学校の視点から、幼稚園教諭は幼稚園の視点から意見を述べ合うことにより、

幼小間の授業観の隔たりを埋め、共通の子ども理解へと導くことになるであろう。

おわりに

これまで二つの文科省指定開発研究から幼小連携に関わる研究開発を事例に即して述べてきた。最後にそれらの研究開発の特徴について整理し、次へ残された課題を明らかにしたい。

二つの事例から明らかになる幼小連携研究の第一の特徴は、幼小連携研究がカリキュラム開発に焦点化して進められていること、中でも幼稚園における総合的な活動の視点から小学校では総合的な学習の時間だけでなく、教科の領域をも含めたより広い枠組み(「みなぎのコース」「はぐくみ総合」)を設定していることである。第二の特徴は、カリキュラム開発を授業時数の調整や活動内容の関連性の側面だけで捉えずに、指導原理や授業観、さらに子どもの見取りのレベルで相互理解、さらには共有の段階(「幼

小合同保育・授業)へと発展させていることである。さらに第三の特徴を挙げれば、*幼小の教員以外の様々な協力者(大学研究者の「保育カンファレンス」への参加)を学校園の外から得ることである。それにより、連携研究が幼稚園と小学校という2点をつなぐ線的連携から、地域や家庭を含んだ面的な連携へと発展する導線となる。*

本研究から得られる幼小連携研究の今後の課題は、*幼小連携を実践的に進めているための「幼小連携実行プログラム」を開発することである。*成果でも述べたように、今までの研究事例により幼小連携カリキュラムについては、様々な事例によってその具体像が明らかになっている。そこで、幼小連携に対する幼稚園・小学校の教員の関心を喚起するところからはじまり、相互に理解を深め、幼小連携に関わる研究を進め、カリキュラムを開発し、それを実践することにより子どもが無理なく幼稚園から小学校へなめらかに接続することを可能にする。その過程では、地域や保護者の参画を得ることなどにより、地域の中で子どもが育つ環境を醸成する。幼小連携研究は、現在、その見通しを持つための全体計画や行動計画を作成する段階に差し掛かっているのではないだろうか。

幼稚園と小学校の連携は、特別に研究指定された地域だけの課題ではない。研究指定校における研究の成果をより実現可能なプログラムに発展させることによって、より多くの地域で幼小間の連携や交流が進み、その地域で育つ子どもが幼稚園と小学校において豊かな学びを形成していくことが可能になると期待している。

<注>

- 1) 有馬幼稚園の研究の経過と実践は、次の書にまとめられている。有馬幼稚園・小学校『幼小連携のカリキュラムづくりと実践事例 ―子どもが出会う教師がつなげる 幼小連携3年間の成果―』、小学館、2002年。
- 2) 教育課程審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の規準の改善について(答申)」、平成10年7月29日。
- 3) 本稿で取り上げる二つの研究開発学校は、筆者が

複数回にわたり観察させていただき、研究の方向性をうかがう機会を得た学校である。ただし本稿における記述については、筆者が全面的にその責を負う。また、本稿の執筆に際し、生活科教育を主たる研究領域とする筆者の関心から、小学校の側から幼小連携を捉える視点が強く反映していることをあらかじめ断っておきたい。本稿で取り上げた二つの事例の他に、山口大学附属幼稚園・小学校の研究開発についても論究する予定であったが、紙幅の都合上言及することができなかった。別の機会を待ちたい。

- 4) 第2年次まで研究では、みなぎのコースの授業時数は次のようである。第1学年では、生活、音楽、図工、特別活動の時間数を統合し、272時間となる。第2学年では、生活と特別活動を統合し、140時間となる。第3学年以上は、総合的な学習の時間の時間を充当し、第3・4学年では105時間、第5・6学年では110時間となる。
- 5) 以下の研究開発資料は、主に口吉川幼稚園・小学校『平成14年度研究開発実施報告書』(第2年次研究)、2002年による。
- 6) 兵庫県三木市立口吉川幼稚園・小学校『平成14年度研究開発実施報告書』、2003年、14頁。
- 7) 鳴門教育大学附属小学校の研究開発における幼小連携の視点については、拙稿「生活科を結節点にした幼小連携カリキュラムについての考察」、愛知教育大学生生活科教育講座『生活科・総合的学習研究』第1号、2003年、25-30頁で詳しく述べた。
- 8) 鳴門教育大学学校教育学部附属小学校『子どもの未来を拓く教育課程の創造(第3年次) 一段階的分化型カリキュラムの構想と展開―』、研究紀要 第45集、2000年、35頁。
- 9) 鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園『文部科学省研究開発学校 平成13年度研究開発実施報告書(第1年次) ―幼稚園教育と小学校教育との連携を図る教育課程や指導方法研究開発―』、2002年、26頁。
- 10) 「はぐくみ総合」とは附属小学校における総合的な学習の場であり、第1学年から第5学年にかけて進められる「生活学習」と、第4学年から始まる「総合学習」からなる。第1学年では、教育課程のすべてが「はぐくみ総合(生活学習)」によって構成され、第2学年では、そこから国語、算数、体育、音楽、図画工作、道徳が分化する。さらに第4学年からは、理科と社会、特別活動が分化していく構造になっている。詳しくは、同小学校上掲書および拙稿を参照のこと。
- 11) 上掲書、39-44頁。
- 12) 報告書によれば、単元「カレンダーをつくろう」

は、算数の教科書（啓林館）における「20までのかず」を中心とした単元として位置づけられる。小学校学習指導要領解説算数編においては、第1学年の内容、「A 数と計算」についての解説の中に「初めは20くらいまでの数について、例えば12は10+2という意味の理解をていねいに取り上げ」と記されている。教科書や指導要領解説においては、「20くらいまでの数」とされているが、木下実践では、カレンダーを作るという生活上の活動から課題が立ち上がっているため、「30までの数」についての学習となっている。

¹³⁾ 上掲書、57-58頁。

*本稿は、拙著「研究開発指定学校にみる幼小連携研究の現状と課題」、愛知教育大学教育学部附属幼稚園『研究紀要』第32号、2003年、75-84頁を元に、若干の修正と改訂を行ったものである。